

年に一度のこどもの日。
月に一度の家族の話題。

毎日毎日が忙しい…。そんな皆さんにも、ぜひ実行してほしいことがあります。それは月に一度、家族みんなで“防災”について話し合いの場をつくるということ。家の中の安全点検や、いざという時の役割分担など。日頃から心の準備をしておけば、地震が起きてもあわてることも少なくなり、被害も最小限にいとめることができますよ。愛する家族みんなのために、月に一度だけそんな機会をもってみてはいかがでしょうか。さっそく今月からでも…。

五月五日は、こどもの日。スクスクと健康に元気に育ってほしいという、いつの時代も変わらぬ親の願いが込められた祝日です。

備える。

準備。予備。整備。装備。守備。警備。
そなえる…用意する、そろえる、用心する
防備。常備。完備。不備。具備。兼備。
そなえ…したく、用意、警戒、防衛
備品。設備。備蓄。備員。備考。備忘。
そなわる…準備ができる、身に付く
●●●ソナエ アレバ ウレイナシ!!



1989
5

SUN	MON	TUE	WED	THU	FRI	SAT
・	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31	・	・	・

■毎月15日は川崎市民地震防災デーです。

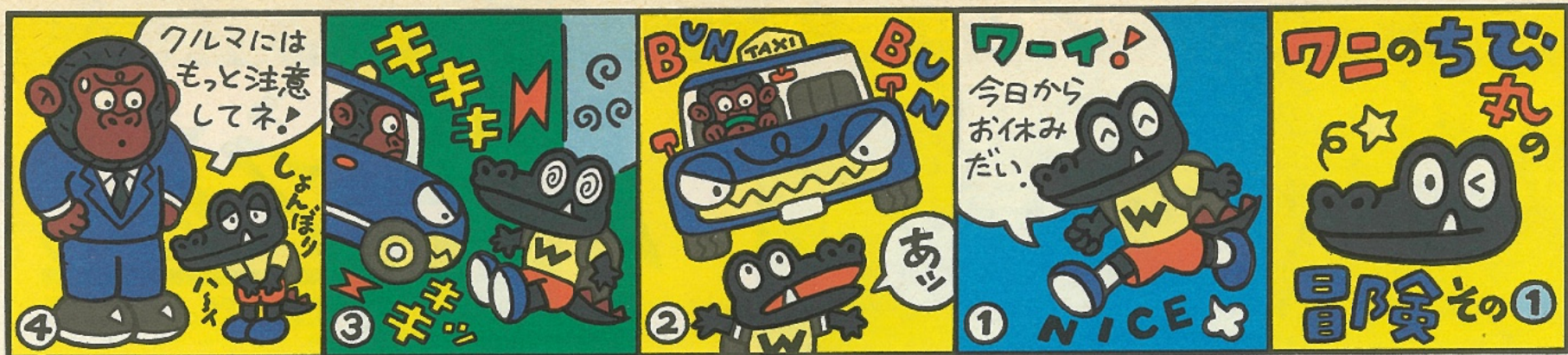


かわさき
防災広報紙

NO

57

1989年(平成元年)4月30日発行
発行@川崎市
編集@土木局防災対策室
〒210 川崎市川崎区宮本町1番地
TEL. (044)200-2111内線2841



備えずにはいられない。

地震は、昼夜を問わずにやってくる。

毎月15日は「川崎市民地震防災デー」です。

広報車や清掃車、またバスの車内放送などで聞いたことがある：と思ひ浮かべる方も多いでしょう。

川崎市では、広く市民の皆さんに地震防災について関心と理解を深めていただくために毎月15日を川崎市民地震防災デーと定め、各種の広報活動を行っています。

いつ起こるか分からない地震に備え、火の元の安全確認、避難場所・道順の確認などを一度夕食の話題にされてはいかがでしょうか。

地震は昼くるとは限りませんから、夜ならどうするかということまで話し合っておきましょう。

家具などが倒れないように点検しましょう

宮城県沖地震では、けがをした人の70%以上の人々が建物の中で。もう一度身の回りの安全を確認しましょう

- 家具などは倒れないように固定してありますか
- 棚から物が落ちないようにしてありますか
- 出入口は確保してありますか
- 小さな子供や病人、お年寄りがいる部屋は安全にしてありますか

家族みんなで防災について話し合ひましょう

地震が起こった時、誰でもがまず考えるのは電話で家族の安否を確認しようということでしょう。でも大地震のときは電話回線が満杯でまずつながらないのではいけません。どこで会うかというところなどを、話し合っておきましょう。

- 地震が起きたらどうしますか
- 警戒宣言が出されたらどうしますか
- 避難場所はどこか、どういう道順があるか、家族の連絡先はどこですか
- わが家で一番安全な場所はどこですか

火の元の安全を確かめましょう

地震で最も恐ろしいのは火災です。「わが家からは火を出さない」という心がまえを持ちましょう。

- 火を使う器具に故障はありませんか
- 火を使う器具のまわりの整理整頓はしてありますか
- プロパンガスボンベは、くさりなどで固定されていますか
- 消火器などは、すぐ使えるようになっていていますか
- 消火器などの使い方を知っていますか



わが家の備蓄品。非常持出品を確かめましょう。

災害時には、応急活動が開始されるまでに場合によっては3日以上以上の時間がかりかかります。日頃から準備をしておきましょう。

- 食糧、飲料水、燃料は3日分ぐらい確保してありますか
- 非常持出品はいつでも持ち出せるようになっていますか
- 赤ちゃん、病人、お年寄り用のものは準備してありますか



こちらお天気情報室

風薫る5月を迎え、一年中で緑が最も美しい季節になりました。

ゴールデンウィークなどに旅行を計画している方もたくさんいらっしゃると思いますが、その時気になるのが、やはりお天気のこと。今回は、このお天気をテーマに、いろいろな情報をお知らせしたいと思います。

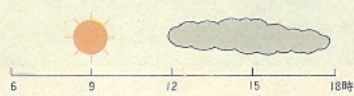
一日の天気予報は、午前6時・9時、正午、午後6時・9時の5回発表されます。

天気予報の中で使われる「○○のち○」「○○ときどき○○」「○○いちじ○○」という言葉の意味は次のようになります。

予報期間が12時間の場合の予報例

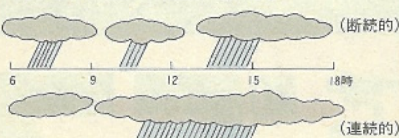
晴れのちくもり(☉→☁)

予報した期間の前半が晴れて、後半がくもりのとき

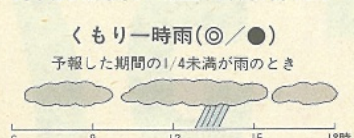


くもりときどき雨(☁/●)

1. 予報した期間の1/2未満が雨のとき

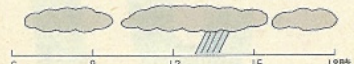


2. 予報した期間の1/4以上1/2未満が雨のとき



くもり一時雨(☁/●)

予報した期間の1/4未満が雨のとき



体験談 56

住民の防災対策と

生活の知恵

日頃の習慣で、地震の被害を最小限にとどめた町。

昭和57年3月21日午前11時半頃、浦河沖地震(北海道)が発生し、近くの浦河町では震度6を記録しています。3月の末に近いとはいえ、浦河町ではほとんどの家庭で火を使っています。石油ストーブを燃やして、そのストーブの上にヤカンが乗っているという家庭が非常に多かったわけですが、そこに震度6の地震がきた。しかしにもかかわらず、死者がゼロ、火災もゼロだったのです。これは極めて異例なことといえます。

被害が少なかつたのもっとも大きな理由は、浦河町の住民の地震防災対策が非常にしっかりしていることだったのです。浦河町は、日本でも有数の地震常襲地帯です。昭和40年から地震の起こった昭和57年までに、震度4以上の地震が20回を超えています。そして2年か3年に一遍、震度5の地震がくる。

そこで住民は、非常に念のいった防災対策を、生活の知恵として行っているわけです。

ちよつと例をあげると、新築の家に新品の家具を入れる。東京あたりでは、新築の家も新品の家具も大事な財産です。財産を傷つけるような気がして、家具の固定をなかなかできない。けれども、浦河町では構わず固定します。いつ地震がくるかわからないという気持ちがあるから、ガンガン釘を打ちつけて固定する。また事業所にはスチール製のロッカーがありますが、そのロッカーには電気ドリルで穴をあけて、壁にしっかりと固定するなどということをするわけです。

特に、浦河町で一番徹底しているのは火の始末です。地震の揺れが始まったときに、反射的に火を消すという習慣が身についているわけです。浦河沖地震のときもそうでした。

彼らはいろんな地震との体験で、耐震消火装置つきの石油ストーブも消えないことがある、と知っているのです。そこで地震がきた途端に、必ずストーブの火を消す習慣がついています。浦河沖地震のときも、同じようにしたわけです。

ところが、この浦河沖地震は初期微動から主要動までの時間が短かった。そこで火を消そうとしてストーブに手を伸ばした瞬間に大きな揺れがやってきて、ストーブの上に乗っているヤカンが倒れたり、お湯がこぼれたりして手にやけどをしたり住人が少ななくなりました。にもかかわらず、ほとんどの住民は火を消しました。ですから、浦河町では火災はゼロでしたが、消火の過程でやけどをした人は結構いたのです。

こういうふうには、地震防災のための生活の知恵、つまり災害文化が身についていた。それが、浦河町が震度6にもかわからず、被害が非常に少なかつた理由でした。(防災S2・7第45号より)